

推薦の言葉

皮膚外用療法において、患者さんから「薬が効きません」と言われると、外用薬の効果を問われているだけなのに、自分の診療そのものにクレームをもらったような気持ちになることがあります。しかしそこで必要なのは、強めのステロイドではなく、診断は合っているか、塗る量や回数は適切か、剤形や部位は合っているか、感染症や別疾患を見落とししていないかを、一つずつ冷静に点検する知識です。

安田正人先生の『皮膚外用薬の使いどころ・使わずどころ』は、まさにその冷静さを身につけるための一冊です。皮膚の基本構造から外用薬の選び方、塗り方、患者さんへの説明、効果判定の考え方まで、患者さんから質問されて困ることが、実に丁寧に網羅されています。ステロイド外用薬についても、効果や副作用だけでなく、疥癬などを見逃したまま漫然と使わないための注意喚起があり、現場で本当に必要な視点が押さえられています。

後半の症例形式の章では、よくある質問に答えるだけでなく、鑑別診断や次にとるべき対応まで具体的に示されています。

本書は若手医師にとっては外用療法の道しるべとして、経験を重ねた医師にとっては日々の説明と判断を見直す機会として役立つはずです。かゆいところに手が届くどころか、かゆくなりそうな部分を先回りして保湿してくれるような、安田先生のお人柄がにじむ、実践的で温かい本として推薦いたします。

2026年5月

近畿大学医学部皮膚科学教室 主任教授
大塚篤司

推薦の言葉

安田先生とは巣鴨高校時代からの同級生ですが、学生の頃から誠実で、人の話を丁寧に聞き、静かに努力を積み重ねる人物でした。授業後に一緒に池袋駅まで歩いたり、ボウリングやスキーに出かけたりしたことを懐かしく思い出します。当時から周囲の信頼を自然と集める存在でしたが、その姿勢は医師となった今もまったく変わっていません。患者さん一人ひとりに真摯に向き合い、後進の教育にも熱心に取り組む、まさに信頼できる臨床医・教育者です。

そんな安田先生が書かれた本書を拝読し、まず感じたのは「これは現場で本当に役に立つ本だ」ということでした。単なる外用薬の解説書ではなく、症例ベースで診療の思考過程が学べる構成になっており、安田先生ならではの“クリニカルパール”が随所に散りばめられています。

例えば、「高齢者の薄い皮膚が裂けてしまった。どう対応すべきか?」「顔面の紅斑をどう鑑別し、どのタイミングで皮膚科にコンサルトすべきか?」といった、救急外来や一般診療で実際に遭遇する場面がとり上げられています。そこでは単に診断名をあげるだけでなく、「まず何をすべきか」「どこまでなら一般医で対応可能か」「どの時点で専門医につなぐべきか」が非常に具体的に示されています。緊急性を意識した判断や、皮膚科受診までの“つなぎ”としての実践的な処方提案も豊富で、非皮膚科医にとってきわめてありがたい内容です。

また本書は、湿疹や炎症性疾患などを扱う「皮膚内科」と、創傷や皮膚損傷を扱う「皮膚外科」の両方の要素をバランスよく含んでいる点も大きな特徴です。日常診療で遭遇する“皮膚の困りごと”に対して、単に薬を処方するだけでなく、「どう観察し」「どう処置し」「いつ専門医につなぐか」という実践的な視点が一冊を通して貫かれています。

外用薬についても、「どの薬を使うか」だけではなく、「どう塗るか」まで丁寧に解説されている点が印象的でした。例えば、外用薬は皮膚のしわに沿って塗る方が刺激が少なくムラもなく、患者さんにも受け入れられやすい、といった、

実地診療で長年積み重ねられた知恵が自然に盛り込まれています。こうした“教科書だけでは学びにくい感覚”を言語化できるのは、安田先生が優れた臨床医であり教育者であるからこそだと思います。

さらに素晴らしいのは、本書が単なる経験談に終わっていないことです。参考文献が丁寧に提示されており、現場で培われた臨床の知恵と、EBMに基づく知識との融合がしっかり図られています。読みやすさや実践性を保ちながらも、「なぜそう考えるのか」を科学的に裏づけている点に、本書の誠実さを感じました。

本書は、皮膚科を専門としない初期研修医や若手医師にとって、日常診療の不安を減らし、「まずここまでは自分でやってよい」という安心感を与えてくれる一冊です。同時に、専門医へ適切につなぐタイミングを学べるという意味でも、非常に価値の高い実践書だと感じました。多くの臨床医にぜひ手に取っていただきたいと思います。

2026年5月

杏林大学救急医学 特任教授
志賀 隆